

興味の尽きない国 オランダ

ぶぎん地域経済研究所 代表取締役社長

島雄

廣



はじめに

初秋、ベルギーとオランダを訪ねた。ベルギーは1830年に独立するまで、ルクセンブルクとともにオランダ共和国に属していた。

日本人にとってオランダの一般的なイメージといえば、風車や運河、チューリップやチーズの平和な国である。ビジネスマンならば、ロイヤル・ダッチ・シェル、ユニリーバなどの巨大企業の名を思い浮かべるだろう。また、鎖国時代に日本と交流のあった唯一のヨーロッパの国であることは知っている。

しかし、オランダがヨーロッパのどこに位置するのか正確に示そうとすると、はっきり分らない。イギリスやフランス、ドイツなどの大国の陰に隠れた「静かな国」というイメージが強いのではないだろうか。

オランダの国名は正式にはネーデルランド

王国である。日本語の「オランダ」は、首都アムステルダムがあるホラント州が語源である。オランダ語の Holland はポルトガル語では Holanda と綴り、頭文字の H を発音しないのでオランダという音になる。戦国時代にポルトガル人宣教師からこの呼び名が伝わったことに由来する。

オランダは国土の4分の1が海面下にあり、長い間“水”と戦いながら、国土を改良して生きてきただけに、オランダ人は粘り強い国民といわれる。そして、厳しい住環境であるため、そこに安住しないで外の世界に出かけて行って、海運や物品の交易だけでなく、広く知識や技術の吸収にも努めるという進取の気性に富んでいるともいわれる。

この興味深いヨーロッパの小国であるオランダが、いったいどのような国なのか、また、日本にどのような影響を与えたのか考えてみたい。

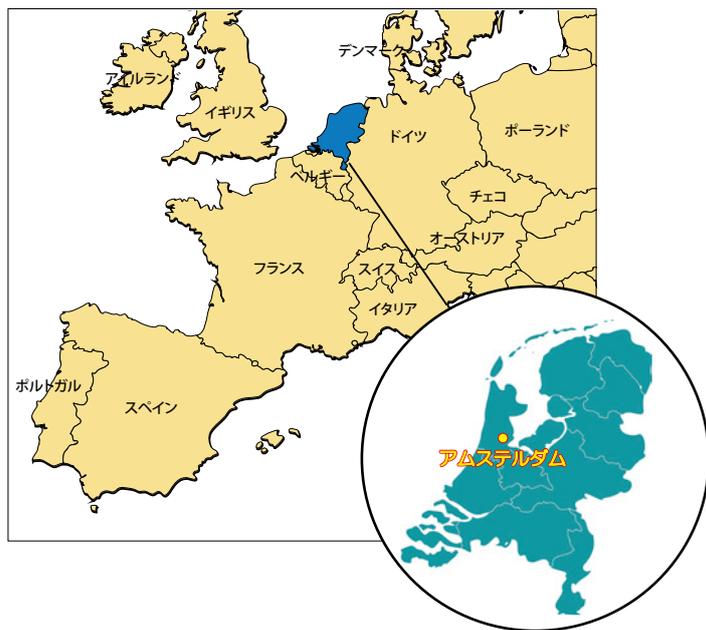
オランダ的なもの

1. 風車

風車の技術は13世紀にフランスとドイツから伝えられ、当初は製粉に使われていたが、オランダ人はこれを排水に利用することを思いついた。水を高い堤防の運河に掻き揚げ、北海へ流す。水を管理するための機械としての「風車」がなければ、この国は存在しなかった。だから、風車はオランダの代名詞となった。今はコンピューターによるエンジン・ポンプで管理されている。

土地が狭く浸食されやすく、資源の乏しい国であるため、絶えず堤防を管理し続け、勤勉に働き続けねばならず、勤勉を徳とするカルヴァン主義がこの国の人々には合い、この国の文化として定着した。カルヴァンは、聖

■大国に囲まれているオランダ



書を最高の権威と考え、厳格な信仰生活を強調したプロテスタントであり、教会への寄進や免罪符の購入などの善行によって天国を勝ち取ろうとするカトリックの教えを全面的に否定した。

2. 割り勘

割り勘は「ダッチ・アカウント」といわれ、オランダ人はケチの代名詞となっている。しかしこれはオランダ人の平等主義の文化がもたらしたものだ。誰かが奢れば、その人が他の人より高い位置に立つことになる。オランダでは皆対等だという文化の意思表示として、割り勘文化が定着した。

オランダのオフィスを訪問すると、まずコーヒーや紅茶などの飲み物とクッキーが出される。この時、クッキー1枚はいいが、2枚取ってはいけない。それは贅沢な行為となるらしい。

オランダ人は倹約家で合理主義者であるため、無駄なお金は一切支出しないが、NGOに対し他の国に比べかなり多くの寄付をする人々でもある。



東京駅のモデルとなったといわれるアムステルダム中央駅

3. 麻薬・飾り窓・安楽死(尊厳死)

オランダの社会問題の解決に対するアプローチはユニークである。アメリカ的解決方法は、その問題部分を摘出し切除しようとする外科手術的手法で、「悪いものは悪い、だから悪いことにしよう」というきわめて原理主義的アプローチである。

オランダの発想は違う。その問題の影響を極小化するように、いかに管理するかという「制御」(コントロール)方法をとる。このオランダ的制御モデルの発想は、この国の治水の歴史からきている。完全になくなることのない問題を完全になくそうとしても、それは地下に潜伏させ、マフィアなどの犯罪組織をはびこらせ、犯罪の根源を見えなくさせるだけだと考えている。

こうした問題解決の方法をオランダ人は「不法だけど不法でない」と説明する。一種のグレーゾーン政策といえる。この曖昧な部分を、一定のガイドラインを明確にすることによって認めようとするのがオランダ方式である。

①麻薬

麻薬は、オランダでももちろん公式には違法だが、個人使用の大麻(マリファナ、ハッシシのソフトドラッグ)の少量所有は訴追

しないという黙認政策をとってきた。オランダではコーヒーショップで自由にソフトドラッグを買うことができる(但し1回3g以内)。この取引は通常の商品の取引と同様に付加価値税が課される。オランダの麻薬教育は、アルコール、タバコ、ギャンブルなどと同列に行い、リスクのあることを知らせ、結果については、自分で責任を負いなさいと教育する。

②飾り窓

飾り窓も制御という発想で合法化している。指定された地域の飾り窓のオーナーに週400~500ユーロを払えば、誰でも飾り窓を借り、その中に立つことができる。オーナーはベッド、毛布、シャワー、タオル、トイレと安全な環境を提供する。定期的な健康診断も行う。女性はビジネスで得た所得に対し税金を払う。「飾り窓」方式にしたのは、女性がドアを開けて、外を通る客の袖を引くことは違法になるからである。

③安楽死(尊厳死)

2001年にオランダの議会は「安楽死法」を可決し、世界で初めて安楽死が法律によって容認された国となった。安楽死の執行要件は5項目ある。

- ア. 患者の自由意志によるものであること。
- イ. 患者の医師から病状と予後について知らされ、熟慮の上での要請であること。
- ウ. 患者の真摯で継続的な希望であること。
- エ. 回復不可能で、耐えがたい苦痛が存在すること（肉体的苦痛と精神的苦痛の両方が対象）。
- オ. 他の医師に相談すること。

最も重要なのは第1項の「患者の意志」である。正常な思考力のある本人の意志による要請でなければならず、それ以外による安楽死は殺人となる。正常な思考力をすでに失い、苦痛にまみれた瀕死の患者をみかねて、家族が安楽死させるのはあくまでも殺人である。オランダの年間の安楽死件数は3,000~3,500件といわれている。



オランダの黄金時代

17世紀はオランダの黄金時代といわれる。オランダは1625~75年ころに歴史上最初のヘゲモニー国家（覇権国家）となり、圧倒的な経済力で周辺諸国に対して相対的に優位に立った。その後、1815~73年のイギリス、1945~67年のアメリカと続き、ヘゲモニー国家といわれるのはこの3カ国のみだと、アメリカの歴史学者ウォーラステインは述べている。

古代ローマ帝国、中世の海洋国家ヴェネチア、大航海時代をリードしたポルトガルやスペインなどは、広大な植民地帝国を築いたが、圧倒的に強い経済力

で優位に立った訳ではないことから、ヘゲモニー国家とはみられていない。

オランダ、イギリス、アメリカのいずれもその時代においては、相対的にはかなりの軍事大国であったが、それ以上に経済力で傑出していた。

オランダはニシンに支えられて「黄金時代」を築いた。ニシンを腐らせずに保存しつつ輸送するという方法が開発され、それを英国に持ち込んで儲けていた。やがてニシンのほかにも、バターやチーズ、果実、毛織物なども積んだ。行く先も地中海からアジアの海に進出し、ついには日本にまで来ることになる。

オランダのニシンは今でも輸出されている。ヨーロッパでは生の魚を食べる習慣はないが、オランダ人は生のニシンを食べる。毎年6月に、その年最初のニシン漁の樽が皇室



165もの運河と1,300あまりの橋があるアムステルダム

に献上され、陛下がそれを口にほうばっている姿が報道される。

17世紀のオランダ経済は、西ヨーロッパで3つのナンバーワンを持っていた。

第1は、アムステルダムを中心とした世界的規模での中継貿易である。バルト海地方から穀物を輸入し、その対価としてイベリア半島などの塩、ブドウ酒、果実やニシンを輸出した。

第2は、ライデンの毛織物生産である。オランダは当時の工業国でもあり、繊維産業の生産効率が上がり、ライデンは毛織物産業で栄えた。

第3は、アムステルダム、ロッテルダムなど6つの都市を拠点にした東インド会社の貿易である。西は紅海の入り口から、ペルシャ、インド、セイロン、ベンガルを経てビルマ、シャム、マレー、インドネシア、台湾、日本に至る広大な海域で貿易活動を展開していた。さらに、造船業、多数の船舶を駆使した海運業、漁業なども限りなくそれに近い位置にいた。

また、アムステルダムには世界で最も進んだ資本と商品の取引所があった。商品の相場表は毎週発行され、先物取引も行われた。中央銀行としてアムステルダム銀行が設立され、高利の金融を追放し、貨幣の混乱を抑えた。これらの経済的繁栄を背景にして、芸術、文化、教育も大いに進み、「疑いもなく、当時のオランダ人は、世界で最も教養があり、最も文明的で、進歩的な人々であった」といわれる。

しかし、オランダの繁栄は英国の嫉妬を生み、フランスの憎悪を買った。20年余に亘って英国との海上戦争が続き、その終息期にはこんどはフランスが陸海両面から攻撃して来た。そして17世紀末になると、国家財政は苦しくなり、国力が疲弊し、衰えへの緩やかな下り坂が始まった。



オランダが日本にもたらしたもの

日本の鎖国は、オランダが対日貿易独占のために企てた計略ではないかといわれる。オランダの狙いは、日本の銀と銅を入手することであった。東インド会社は、日本で需要の大きい中国産の生糸を持ち込み、その対価として大量の銀や銅を日本から持ち出し、それを使って東南アジアやインドで香辛料や綿布、硝石などを買い、本国に持ち帰っていた。黄金時代の東インド会社の利益配当率は、実に出資額の60%にも達していた。

オランダは狙い通り日本との貿易を独占する一方で、鎖国下の日本に世界の情報と西洋の学問をもたらした。オランダ船は長崎に入港すると、最新の世界情報を「オランダ風説書」として幕府に提出する義務を負っていた。オランダは世界の隅々に進出しており、世界で最も豊富な情報量を誇っていたので、幕府はオランダの目を通じて世界を効率よく見ていたことになる。これらのオランダ人がもたらした情報や科学を基に、日本国内で洋学の伝統が細々ながら築かれ、明治以降の本格的な科学技術の導入の橋渡しをしたといえる。

オランダは、近代科学の叙述を解り易いものにするため、平易な日常語を繋ぎ合わせて次々に学術用語を造り出した。日本人が本格的に取り組んだ最初の西洋語が、このような特徴を持つオランダ語であったことは、誠に幸運であったというほかない。たとえば、「酸素」、「水素」、「炭素」や「角膜」、「結膜」、「網膜」そして「小腸」、「大腸」、「盲腸」などの専門用語は、オランダ語の「酸」と「素」、「角」と「膜」、「小」と「腸」という単語を構成要素に分解し、それぞれに漢字を当てて再び組み合わせて作った新しい言葉である。もし英語が先に日本に入っていたら、今日のような

阿姆斯特ダム国立美術館
世界屈指の中世絵画の傑作を収蔵



フェルメール「牛乳を注ぐ女」
「ラピスラズリ」を原料とするブルーが美しい

レンブラント「夜警」
特殊な LED ランプで照らされる中央の
人物が飛び出てきそう

「～素」、「～膜」、「～腸」という揃った訳語にはならなかっただろうし、そもそも適訳を見つけるのに大変な苦勞をしたはずである。

福沢諭吉は、オランダ語をマスターしたのちに、新たに英語を学び始めたときの心境を『福翁自伝』で次のように綴っている。

「最初私どもが蘭学をすてて英学に移ろうとするときに、真実に蘭学をすててしまい、数年勉強の結果をむなしゅうして生涯 2 度の艱難辛苦と思ひしは大間違ひの話で、実際を見れば蘭といい英というも等しく横文にして、その文法もほぼ相同じければ、蘭書読む力はおのずから英書にも適用してけっして無益でない」

オランダ語の土台があったから、他の西洋言語の習得もゼロから始めるよりはるかに容易だったのである。『福翁自伝』ではアメリカを訪れた際、アメリカ人が得々と解説してくれるメッキ法やテレグラフのことを、すで

に日本で蘭書を読んで知っていたと繰り返して述懐している。ここでも蘭学が日本の近代化の助走路になったことがうかがえる。

アジア諸国のうち、西欧中心の「近代世界システム」への従属を強いられた国々が多数を占めるなかで、数少ない例外として日本がいち早く西欧に追いつき得たのには種々の理由が考えられるが、その要因の 1 つとして、日本だけがオランダ語を西洋研究のための跳躍台にできたからではないだろうか。

- 参考文献 -

- 「街道をゆく 35 オランダ紀行」 司馬遼太郎
(朝日新聞社 1991 年)
- 「繁栄と衰退 オランダ史から日本が見える」 岡崎久彦
(文藝春秋 1991 年)
- 「オランダモデル」 長坂寿久
(日本経済新聞社 2000 年)
- 「オランダを知るための 60 章」 長坂寿久
(明石書店 2007 年)
- 「物語 オランダの歴史」 桜田美津夫
(中公新書 2017 年)